國學院大學学術情報リポジトリ

選評 鯰絵と板元:入選論文

メタデータ	言語: Japanese			
	出版者:			
	公開日: 2023-02-05			
	キーワード (Ja):			
	キーワード (En):			
	作成者: 石隈, 聡美, Ishiguma, Satomi			
	メールアドレス:			
	所属:			
URL	https://doi.org/10.57529/0000089			

もので、ほとんどのものに作者の署名も板元の印も残されてい踏む必要があったが、鯰絵は改めを受けることなく販売されたを受け、その改印を刻したまま摺出し、販売するという手順を

鯰絵と板元

はじめに

ぶ職人などが描かれた、「鯰絵」が流行した。当時錦絵の出版鹿島大明神と要石、被害にあい怒る庶民、そして復興需要で喜起こすという俗信に基づいて、鯰を懲らしめる地震よけの神を政二年(一八五五)十月二日の江戸地震直後、鯰が地震を

の際には、原稿である「版下」の段階で、検閲である「改め」

風刺を盛り込んでいた鯰絵は、江戸の世相に合い、大いに人気ない。震災後損得二極化した庶民の様子を描写するなど、世情

石隈聡美

残っている。 関り取られるという強行措置を受けて流行が終了した記録が 二ヶ月半を経た十二月半ばに、三百枚以上の板木が没収され、 を博した。現在でも二百種以上の図像が確認される。しかし、

る手がかりとして、前年に同じく無改めで出版され、流行した者、主に絵師の制作姿勢に興味を持ってきた。そしてそれを知終的に取り締まられて板木を削られたことから、正体不明の作これまで執筆者は、鯰絵が無改めの出版物であることや、最

稿を依頼した、 であり、 品群は、

制作者の

員としての板元に焦点をあて、

ć

大きな手がかりとなる。

本稿では、

絵師や戯作者に原

制作者が明らか

改めを受け出版されていることから、

盲

してい 五年 團 干郎

る。

死絵の中に役者見立名所の

が板木が 同六年

流 Ó

用

Ó

「役者見立名所絵」

の流行と、

斉

吊川

0

死給

や

その死絵に板木を流用

したと

n 摘発に注 される嘉永 八代目

たと思われるものが二点あることは知られているが、この

Ŕ

あまり知られていない。

1】と【表2】にまとめたとおりである。

役者見立名所絵

0

発と関連付けて語られることは少ない。

また、

鯰絵にお

7 摘

役者見立名所絵と構図を同じくするものが存在することは

調査対象としている作品は、

別紙

表

鯰絵の筆

時系列整 理

藤 岡 屋日 記 の第十 五巻では、 安 政 江 戸 地

震に

関する



鯰絵 155「要石補助力にてあたうちの図 (鯰に御札を貼る 1855年 国立国会図書館所蔵

る3

それらでは 写されてい 行した様子が描 でも、

摺物が流

なねの

 \mathbb{H}

る。

笠亭仙果の

録が残されて

当時広まった摺 物に関しての

そしてその

た いが、 は使わ 御神像をあ 0) という言葉 一くさぐ 人 れてい 拝 か す L ま

された天保十二年から、

再

興の嘉永四年までの

地本問

屋の活

動 īŀ.

また、

問 0 たのか、 屋

仲間制度が廃

震災時

幕末期に活動が盛んであった板

実態を明らかにしたい

以降の筆禍史を整理

どのような状況であったかを探る。

らが

幕末の

板

元の

中でどのような位置にあ

整理する。

作例や絵師・

戯作者との関係性、

住所などから、

彼 を

た十一人を中心に、

当時

の江戸における板元についての情報

役者見立絵で処罰の対象となった十六人、

鯰絵に関

わ み

0



「鯰退治」 鯰絵 61 1855 年 国立国会図書館所蔵

関する記述は多く 物の取り締まりに

があるが、それ

鯰絵ほどつ

+

を併せて、 なゐの日並』と た例は少ない。 江戸地

を含む、地震に関する錦絵の事を指していると考えて良いだろ 存の鯰絵の の人ども大なまづをせめなやます」などと表現されており、 『藤岡屋日記』は、 [図1]、[図2] などから判断しても、 江戸の書肆藤岡由蔵が文化元年から慶 それが鯰絵 現 う。 震後の鯰絵の出現とその取り締まりに関する時系列整理を行

十月二 十月四日 日 地震や火災に関する摺物が出回り始める。

地震発生。

五年間記した日記 応四年までの六十

公私の事件の

物も大評判。 が間に合わないほど売れた。 、屋久助が色付きの摺物を売ったところ摺 行事に出版許可を貰おうと板元 両国屋庄吉の摺

して、 が鯰絵などを見せた。 没収を命じる。 しかし行事はそれに反

一十一人の板元、板木摺職の者が嘆願書を作

十一月一 日 成 嘆願書を行事に提出するも、

記中に、

錦絵や書

説の聞き書きで構 版の書写、巷談街 聞き書きやかわら

成されている。日

十一月二日

提出されず。六十九枚の板木と摺物が、

結果、

名主には

の蔦屋吉蔵に差し出される。

・十一月九日 月十日

ぶさに記録が残さ

月三日 新たに摺物が売り出される 売買禁止令が出される。

し出し、 行事が絵草紙小売を廻り、 今後は改印の無い品物は扱わない 「在庫はすべて差

との誓約書に連印させる。

十一月十六日

行事が地本問屋を集め、

誓約書に連印させ、

・十二月四日 見廻り同心が、出版を続ける者がいて、売り翌十七日に提出。

り調べを受けた。 て見廻り、九人の絵草紙屋を逮捕。九人は取上げを伸ばしていると摘発。同心が手分けし

で ・十二月十日 総草紙屋百四十五人が、改印のない品物を売するという条件で釈放される。 するという条件で釈放される。 取り締まりを強化 ・十二月六日 地本問屋や家主、五人組から、九人を解放す

も明らかではない。しかし、逮捕された九人の名は明記されては明らかになっていない。また、最終的に処罰された八十七人い時期から鯰絵出版に携わっていた者だと考えられるが、名前十一月二日に嘆願書を出した二十一人の板元は、おそらく早

この、鯰絵に関わった品川屋久助という人物については、先行という人物も、摺り、販売する職であったことがうかがえる。という人物も、摺り、販売する職であったことがうかがえる。万屋吉兵衛、遠州屋彦兵衛、清水屋常次郎、西村屋与八、丸屋いる。上州屋金蔵、湊屋小兵衛、越後屋鉄次郎、山本屋平吉、いる。上州屋金蔵、湊屋小兵衛、越後屋鉄次郎、山本屋平吉、

―二 品川屋久助に見る鯰絵制作者像

研究がある。

助を以下のような人物であるとしている。

今田洋三氏は『鯰絵

震災と日本文化』

において、

品川屋久

から板木摺職の者と考えられる。・当時の絵草紙問屋や板木屋仲間の名簿に名前がないこと

列番付」に類似したものを出版し、安価で売った。嘉永三年に、他の板元が出して人気があった「琉球人行

蕎×豆=こ、コオケ豆皆月)と会ぶ電ティ、品ー屋入り鬼夜行絵之番付」の重版を品川屋久助が出版した。嘉永四年に、他の板元が出し、発禁になった「大蜘蛛百

嘉永六年に、他の板元が出した本『江戸砂子細撰記』のも出し、いずれも没収された。

重版を出し、家主預けの処分を受けた。

上げで、 元 ある。 Ш は、 さばいたりするなど、 であった虎屋倉吉がかわら版師であることや、 鯰絵制作の中心となっていた可能性があり、 の者が嘆願書を出していることからも、濃厚である。 屋久助が買い、 当時重罪であ という立場ではない、 また、 嘉永四、 これらの情報から考えると、正式に問屋株を持つ「板 虎屋倉吉とともに魯文に家を買い与えたという記述が 鯰絵作者として明らかである仮名垣魯文の伝記に 五年頃、 った類板や重板を犯したり、 仕事を依頼、そして嘉永六年にそれらの売り まだ駆け出しであった魯文の才能を、 掟破りの人物であったことがうかが 自ら摺りも行う 「摺職」 それは魯文と懇意 それを安価で売り 十一月一 の者などが 日 え

嘉永四年から安政二年にかけての筆禍と板元

渡亭・ ある。 川豊国 鯰絵には、 地震の前年の嘉永七年八月六日に自死した八代目團 (初代国貞。 陽斎など。) [図3]と [図4] 弘化元年 が描いた役者絵に構図が似たものが多く (1844)のように、 には豊国を襲名。 地震以前に三代歌 号は五 干郎

いる。 枚近く

代目の死絵の中には、

役者絵の板木をそのまま流用

関係性に注目して

死絵と鯰絵とは、

無改め出版であることや、

期間

に二百枚

出版されたことなどの共通点があり、



図4 鯰絵 157「名石千歳刎 男 之助せりふ」1855 年 国立国 会図書館所蔵

図3 五渡亭国貞画「荒獅子男 之助 市川團十郎 仁木弾正 市川海老蔵」1833年 早稲 田大学演劇博物館所蔵

立名所絵とは二点が同構図である。また、 る。 たのではないかと思われるほど、 図 5 ح 図 6 図 7 ح 構図が酷似しているもの 図 8 十九点に没日以前 0 ように、 役者見 が あ

考えられる。

役者見立名所絵が元となったと見られる死絵は二

木 改 0 印

背景を削 が残されてい

り取 h る。

色数を減らして摺り、

死絵に応用したと

すでに役者絵として出版していた者の



八代目 図6 三代歌川豊国画 國十郎死絵「清水清玄」1854 年か 藤岡屋慶次郎板 改 印「子十一、米良、渡辺」早 稲田演劇博物館所蔵



三代歌川豊国画「東都高 図5 名会席尽」「清水清玄」1852 年 11 月 藤岡屋慶次郎板改印「子十一、米良、渡辺」 早稲田演劇博物館所蔵



團十郎死絵 「嘉永七寅年八月 六日 猿白院成清日田信士 八 代目市川団十郎 行年三十二才 大阪天王寺村一心寺二葬 江戸 菩提寺芝塔中あかん堂」改印 「子十、村松、福島」 1854年 早稲田大学演劇博物館所蔵



図 7 三代歌川豊国画「東海道 池鯉鮒鳴海間 有松 伴左衛 門」1852年10月 玉屋惣助板 改印「子十、村松、福島」 早稲田大学演劇博物館所蔵

図9

鯰絵 158「玉屋地新兵衛 桶伏の段 火夜苦の門並」 都立図書館所蔵 1855年



歌川国芳画 次の内 玉屋新兵衛 小女郎」住吉屋政五郎板 改 印「子六」 1852 年 5 年 6 月 ボストン美術館所蔵

ることから、 実態について見ていく。 役者見立名所絵に注目し、 嘉永六年の取り締まり

嘉永5年の役者見立名所絵の流行

作の役者見立絵 となっていること、 点であるが、

図9 また、

の構図

囚が鯰絵

図 10

に用

いられ ħ る国 ħ 発禁 芳

嘉永六年二月二十五日に取り締まりが行わ

同時に摘発にあったと思わ

シリ 道五十三駅」では、 板元で分担している例が多い。 その数四百図弱である。 み合わせて描く役者見立名所絵を大量に手掛けるようになる。 かる。これらは総数が多いのもあり、 みても、流行し、 宿」と三シリーズに百四十一図に及ぶ人気であった。 役者見立東海道五十三駅」を皮切りとして、役者と名所を組 Ŧi. 三代豊国は、 国芳も役者見立名所絵を描いており、【表2】の 住 吉 ズが辻岡屋文助、 図 11 屋 井筒屋庄吉の四 当初の五十六図で終わらず、 嘉永五年閏二月から嘉永六年にかけて出 政五郎 文政頃から東海道を主題とした揃い物を制 約一 のような双六も多数手掛けている。 第一期が辻岡屋文助、伊勢屋兼吉、 井筒屋庄吉、 年間の間に集中して出版されたことが 中でも、 住吉屋政 第二 例えば、 前述の「役者見立東海道 蔦谷吉蔵の五人、 一期が辻岡屋文助、 五郎、 一シリーズを四 第二期、そして 前述の 井筒屋庄 「役者見立 間 伊 一つ以上 派生作品 版され 並 蔦屋吉 勢 住吉屋 0) 作 屋 Ŧī. を わ



屋庄七版 1852 年 8 月 75cn 学附属図書館双六コレクション

75cm × 73cm

る、

絵出版においては、

のシリーズの宣伝の機能があったのではないかと主張する。

いとわない、という作者の制作姿勢も見られる。

また双六のように同じ図様を違うサイズで作り直すことも

人気のあるうちに畳みかけるように出版す

六にされたのは、 の描いた、 す際には、

元の作品の板元とは異なる板元から出す場合もあ

松村倫子氏は、三代豊国や二代国

貞 双

たことなどが読み取れる。

錦絵の双六化作品がまだまだあることを指摘し、

人気があったからその勢いに乗った、

また元

嘉永六年二月二十五日の取り締まり

藤岡屋日記』のみである。 役者見立名所絵の取り締まりについての記述があるの

藤岡屋日記』 嘉永六年 (第五巻

○二月廿五日、 昼過より南風出、 晴天

今日売出しにて、 浅草地内雷神門内左り角 四ッ時拍子木廻候也 鬼神お松、 曇り、 錦絵板元 大 石川五右衛門・児来也、 、南風ニ 成、 とんだりや羽根 夜二入益々大風 助

の賊を画、 三幅対と題号し、 三板 (枚) 続ニて金入ニ致

と、この時期多くの板元を相手にしていたこと、派生作品を出

変人気であり、 元となっている。 三駅看立双六」

一代豊国

国芳が精力的に制作をしていたこ

直次郎と九人によって出版されている。

(嘉永五年八月)

では、

錦昇堂笑寿屋庄七が版 派生作品の双六

五五 清

役者見立名所絵が大

これらのデータからは、

高

田屋竹蔵、

上総屋岩蔵、

小

林泰治郎、

玉屋惣助

水屋 +

判にて、懸り名主福島三郎右衛門より察斗ニ而、 代料壱匁五分ヅゝにて四匁五分ニて売出し候処、大評 廿八日ニ

板木取上ゲ也 三賊で唯取様に思ひしが 飛んだりやでも羽

もげ助

右羽根助 ハ板摺の職人ニ而、 名前計出し、 実の板元は三

浅草並木町 湊屋小兵

長谷川町新道 本橋品川町 魚屋金治郎 住吉屋政五郎

右三人、三月廿日手鎖也

其外右之類都合八十両 同十二支、 東海道五十三次、 同十二ヶ月、 同合之宿、 (枚カ)是も同時ニ御手入ニ相 同江戸名所、 木曾街道、 同東都会席 役者三十六哥 図

り摺絵も取上ゲ裁切候よし。 り名主村松源六より右之板元十六人計、 銀二匁、中品壱匁五分、並壱匁宛ニ売出し大評判ニ付、 右絵を大奉書へ極上摺ニ致し、 於本町亀の尾ニ、絵双紙掛名主立会ニて、右板木を削 極上品 板木を取上ゲら 頑 価壱枚ニ付 掛

宿

群を指すと考えられ、これが全て取り上げられたとすると、

右之如く人気悪しく、奢り増長贅沢致し候、 東海で召連者に出逢しが 皆幽霊できへて行け の風

俗ニ移り候、是を著述

前半は、三枚続きの役者絵についてであり、役者見立名所絵

戸名所、 うか」を指しており、 に関しては、 後に豪華摺りが出版されている。「東海道五十三次、 なる。「役者見立東海道五十三駅」についても、 るはずだが、その一年後の嘉永六年に豪華版が出されたことに 川小団次」「月・児来也・市川団十郎」「花・鬼神於松・板東し ることから、 大判錦絵の相場は三十文前後であった。銀は一匁が約百文であ を作って売ったためであるとされている。天保の改革により、 1】でも示したように、三代豊国画の「雪・石川五右衛門・市 け高額でも、「大評判」であったという。「三幅対」は、【表 大判錦絵は、一枚十八文までと定められていたが、江戸後期の 木曾街道、役者三十六哥仙、 同東都会席図会」は、【表2】の(一)で示した作品 後半に記述がある。取り締まられた理由は豪華版 前述の価格一匁五分は、百五十文である。それだ 嘉永五年十一月に改めを受けた作品であ 同十二支、同十二ヶ月、 初版から一年 同合之



図 12 三代歌川豊国画 道五十三次の内 戸塚 勘平」辻岡屋文助板 「子三」 1852 年 3 月 田大学演劇博物館所蔵

改印 早稲

かと推測

したが、

嘉永五年二月十七日に四代目中村歌右

衛

る。 屋竹蔵、 ていないが、 \mathcal{H} 百四十七図とその 伊勢屋兼吉、 日記中では、 上総屋岩蔵、 表 2 住吉屋政五郎、 取り締まられた板元十六名の名前は明記され 板木が取り締まりの 0) 小林泰治郎、 板元欄と照らし合わせると、 井筒屋庄吉、 玉屋惣助 対象となったことにな 蔦屋吉蔵 清水屋直次郎、 辻岡屋文 高 畄

金次郎、 藤岡屋 慶次郎であろう

大の流行とされ

7

いる 團十

~が、

死絵は、

八代目

郎

0

) 死後に二百枚近く出版されたの それを取り締まったという記録

最

は見 が

かけない。

追悼出版物であるから規制の対象とならなかったの

<u>_</u>

死絵の取

り締まりと八代目團十郎

湊屋小兵衛、 林屋庄五郎、 加賀屋安兵衛、 辻 屋安兵衛 角 一本屋

> また、 記 を取り戻そうとした団扇屋が死絵に関与した可能性もある。 様の着物などが売れなくなったとの記録もあるので、 と思われる。 初代坂東しうかの死絵に関しては、 死去した際に発行された死絵や、 死絵のみにて他の書なし、 死絵に関する記述が一切ない。 を残してきた ることから、 行きても此の話計りなりしが、 枚絵草双紙三百餘通出で」という言葉で表現されてい 『芝居秘伝集』では、 八代目の顔を描いた羽子板や団扇、 おそらく八代目の際にもなんらかの 鯰絵や役者見立名所絵の筆禍に関して詳 『藤岡屋日記』 古今稀なる人気と驚きたり 一此のとき江戸中大評判にて、 には、 果して町 『歌舞伎年表』、 安政二年三月六日 没収されたとい 八代目團十郎自 マクの 團十郎にちなんだ紋 錦絵店、 動き 歌 う記 死 iz その損 舞 は 0 細 死 妓 な記 去し 速 あ 升 年 報 何 つ が 代 o) た

を受け 絵師が意志を持って死絵に携わったのではなく、 れてきた。 なくないことから、 玉 や国芳の落款のある死絵は、 代目の死絵に関しては、 たも しかし改印順に並べた 0 が 圧倒的であることがわかる。 早くから豊国と国芳が関与したことが言わ 豊国や国芳の落款のあるもの 八代目自死の八月以前に改 表2 の そのことからは (一) を見ると、 板元が勝手 が



に整理した。

や鯰絵に関わっ

た板元と重複するものも見えており、【表3】



残しながら、

処罰の対象となることを恐れて自身の名前を削らせたとも捉え

板元印が除かれている例が数点見られる。

板元が

は、

られるし、

豊国の落款を残すことは、

豊国画であることにブラ

死絵

図8

を見比べると、

豊国の落款や改印などはそのまま

元の役者絵

図 7

ح

り直した可能性が高いと考えられる。

もしくは許可を取って、

既存の役者絵の板木を死絵として

1854年9月 三代歌川豊国画八代目團十郎死絵 図 13 早稲田大学演劇博物館所蔵

ると、 比寿屋庄七、 同じであるとすると、 はないかと考える。仮に、 見られる。 線をとらず、 る死絵の中でも、 加賀屋吉右衛門、 ように感じられる。ここに、 ンド性があったからだとも捉えられる。また、 青をベースにした、 木屋宗二郎、 布目摺りで凹凸を、 [図13]は錦絵として購買意欲をそそるものとなってい 藤岡屋慶次郎、 色数が多く、 板木を流用された死絵との差別化の意図がある 図 6 白と黄色で質感を表現するなど、技巧上の工夫が 伊勢 屋兼吉。 八代目没後の九月の改印を持つ 伊場屋仙三郎、 山本屋平吉、 Þ 画中で八代目の描かれた掛軸の 関与したと考えられるのは以 海老屋林之助、 簡素化されて寂しい印象であるのに対 図 8 が、 着物もキメ出しで柄を表現、 元の役者絵と流用した死絵 これらの名前には、 豊国の絵師として完成度を追 高野屋友右衛門、 井筒屋庄吉、 背景を削り色数を減ら 林屋庄五郎 豊国の落款 役者見立名所絵 山崎屋清七、 辻岡屋文助 図 下 三田屋喜 の板 紙部分に 花は輪郭 13 0 通りに 一究す 0 0 元

=

三 江戸後期における板元の活動

う「地本問屋」に分類され、 ここまで「板 草双紙、絵双紙、 玉 仏教関係書、 元」との呼称で扱ってきたが、 洒落本、 錦絵、 医学書などを扱う「書物問 錦絵、 死絵、 浮世絵、 鯰絵は、 長唄本などを扱 当時の本屋は、 地本問屋 屋 かか

天保の改革による仲間解散と嘉永四年の再興

ら出版されていたと考えることができる

えであった。十年の間に板元として活動する者が増えていたた 生活も安定せず、それならば仲間組合で自治をさせようとの考 限を厳しくするあまり、 することで、物価が高騰すると捉えられていたため、 しかし十年後には再興している。 天保十二年十二月十三日、 従来の仲間加入者を「本組」とし、 庶民生活安定の名目で仲間を廃止したと考えられている。 本屋の問屋仲間も解散した。 流通に支障をきたすようになり、 すべての問屋組合の廃止が命じら その理由は、 仲間組合が株仲間で営業独占 新たに開業したものを 錦絵に関する制 物価引下 結局

選ばれていた。

嘉永五年の「市中取締類集」には仮組の板元

取り締まり当番など月行事の役職は本組から

組」とした。

な数のデータがないが、直前の三年間では以下の通りになる。感じ取れる。地本問屋数は、嘉永七年と安政二年に関して正確でおり、本組と仮組の扱いの格差や、仮組の貪欲な商売意欲がが、重版などルール違反やトラブルを起こすとの報告がなされ

· 嘉永五年 百五十四名 同

嘉永六年 百四十七名 うち、本組二十九名、仮組百十八名

数字上では変化の無い本組も、人員が変化している。

三―二 鯰絵に関与した板元の立場

兵衛、 取り締まる側であるべき立場である。遡ってみると、 山本屋平吉が関与している。品川屋久助や両国屋庄吉は今一つ しても、 上州屋金蔵、 された九人の内に、 ここでふたたび鯰絵の筆禍について【表3】を見ると、 丸屋甚八、西村屋与八の五人が名を連ねている。 仮組地本問屋の関与も多いが、 山本屋平吉は地本問屋世話役であり、 本組から上州屋金蔵、山本屋平吉、 本組から辻岡屋文助や 本来ならば 死絵に関 しかも 万屋吉

三 | |-

関

歩き回って集めた情報を基に、 残している。 作者の笠亭仙果は、 肆を探すためでもあった。 仙果の訪問は、 ないことや、 鯰絵に関与するには、 和泉屋市兵衛、 笠亭仙果の記述による震災後の状況、仮名垣魯文と板元 品川屋久助の元を訪れたことを伝えている。笠亭 和泉屋市兵衛宅の被害が激しく、仕事どころでは 見舞いや状況確認のためでもあるが、江戸中を 佐野屋喜兵衛など有力問屋を回った記録を 地震から三日後に恵比寿屋庄七、 震災時無事であった必要性がある。 原稿を作成し、売ってくれる書 蔦屋 吉 戯

衛などが関わっていた可能性がある。 依頼の多かった虎屋倉吉、 に来たとの記述から、 現文京区湯島 である河鍋暁斎とともに制作を行ったとしている。 三代豊国の関与にも触れている。 名垣魯文は、 一一三丁目)との距離が 自ら鯰絵関与を認めている戯作者であり、 魯文の安政2年当時の住所、 品川屋久助 地震の翌日に書肆が注文 近い 糸屋庄兵衛、 、板元や、 湯島妻恋町 地震前に 森屋治兵 伝記で 絵

る。

板元が同様の趣向で鯰絵などを制作させた可能性もあ

らず、完全にこれらの板木を没収したかは疑問に感じる。 果であったように思う。 ろうか。また、出版禁止となったことで、その利益を取り返す を免れた板木が、 者見立名所絵の流行をおき、 ものがあることは知られていながら、嘉永六年の取り締まりと の死絵に、 の枚数や、二日掛けて「車四台分」集めた記録などは残ってお 総数約五百四十七図に及ぶことを再確認したことは、 結び付けて捉えられることは少なかった。筆禍の流れの中に役 わった板元を手掛かりに、 鯰絵に関わったと考えられる板元を、嘉永四年からの筆禍に 既存の役者絵や役者見立名所絵と構図を同じくする 死絵に流用された可能性があるのではない 鯰絵の取り締まりの際のように、 取り締まりの対象となっ 整理してみてきた。 八代目 大きな成 たの 團十

認したことで、 とはできなかったが、 まで確固たる証拠がなかった。 死絵における板木の流用も、 板元印のみ削り取り、 絵師の落款、 今回の調査でも、 同構図であるというほかはこれ 改印、 落款や改印を残して摺り 板元印の有無を再確 明 ?確にするこ

生前に描かれたものであることが確認でき、 の時系列に並べ直したことで、 性が浮上した。また、三代豊国と国芳の落款の残る死絵を改印 直した例があることが判明し、 ほとんどの作品が八代目團十郎 板元が意図を持って行った可 死後に改めを受け 能

離れたところで板木が流用された可能性が高まった。 て出版された作品との作風や技法の違いから、 絵師の意識から

屋が関わっていたことから、 りが多いという記録がありながらも、 動例についてもさらにみていく必要がある。また、仮組に掟破 譲渡された背景なども探る必要がある。 の程度行われていたのか、また嘉永五年に八件の地本問屋株が 地本問屋仲間に正式に参加している板元を中心に見てきた 品川屋久助のようにその素性が明らかでない摺職の者の活 問屋仲間内の自治がどのようにど 鯰絵に多くの本組地本問 今後の課題としていき

- $\widehat{1}$ (1) **鯰絵の取り締まりに関しては以下の二つの資料に詳しい推移が記録さ** 『近世庶民生活史料 れている。 藤岡屋日記 第十五巻 三一書房 1995 PP.611
- (2)笠亭仙果著 『なゐの日並』(『日本随筆大成 第2期 吉川弘文館

1975) P757

された。代表される作品は、【表2】の(一)で示した。 ト作であり、翌年までに約十一シリーズ・約五百五十図の作品が出版 された三代豊国の「役者見立東海道五十三駅」シリーズが最大のヒッ 筆者は「役者見立名所絵」と総称している。嘉永五年閏二月から出版 嘉永五年から六年にかけて、東海道などの名所絵を背景に、歌舞伎 舞台設定などで地名と結びついた役者を見立てで描いた作品群を、執

2

前掲注1の(2) 宮田登・高田衛監修 『鯰絵 震災と日本文化』 里文出版

3

 $\widehat{4}$

- 松村倫子 野崎左文編『仮名反古』(『私の見た明治文壇』 2002「出版文化の中の双六」(『幕末・江戸の絵双六』 国書
- 『近世庶民生活史料 『市中取締類集』や 般に錦絵の取り締まりに関しては、『藤岡屋日記』だけではなく、 『武江年表』においても記録が残っていることが 藤岡屋日記』第五巻 三一書房 1989

 $\widehat{7}$

6 5

刊行会 2002

- 8 参考にした。 地本問屋数、 本組、 仮組の数の推移については、 以下の二つの資料を
- 日本書誌学大系14 近世書林板元総覧』青裳堂書店
- (2)(1)彌吉光長著『書誌書目シリーズ26 未刊史料による日本出版文化

第

9 前掲注1の2に同じ

三巻 江戸町奉行と本屋仲間』

ゆまに書房

1 · 石塚豊芥子編 【参考文献

- 2 · 石井研堂著 『増補改訂 『花江都歌舞妓年代記続編』 国書刊行会 1907 錦絵の改印の考證』、『地本錦絵問屋譜』
- 辰書店 1920(『近世文芸研究叢書 錦絵の改印の考證 地本錦絵問屋譜』クレス出版 第一期文学編9 一般2 嵯峨本考

会 1994

『NHK ブックス 江戸の本屋さん 『歌舞伎年表』岩波書店 1962 近世文化史の側面.

H

5・『日本書誌学大系16 本屋のはなし』青裳堂書店 198

本放送出版会 1977

6 · 『原色 浮世絵大百科事典 第三卷 様式・彫摺・版元』 大修館書店

8・滝沢馬琴著 7・北原糸子著『地震の社会史』三一書房 木村三四吾編『近世物之本江戸作者部類』八木書店

1988

9 · 斎藤月岑著 11:『大日本近世史料 市中取締類集二一 書物錦絵之部四』東京大学出版 10・北小路健著『板木屋組合文書』日本エディタースクール出版部 金子光晴校訂『武江年表』平凡社 1989 1993

14・南和男著『幕末維新の諷刺画』吉川弘文館 1999 13.佐藤悟「名主双印試孝」『浮世絵芸術 129 号』国際浮世絵学会 12・南和男著『幕末江戸の文化 浮世絵と諷刺画』塙書房 1998 1998

15・岩切友里子「天保の改革と浮世絵 143 号』国際浮世絵学会 2001 動向と名主単印試考 付、「シタ売」印についての私見」『浮世絵芸術 国芳の揃い物を中心にした錦絵の

17・加藤康子・松村倫子『幕末・江戸の絵双六』 国会刊行会 16・藤澤茜著『歌川派の浮世絵と江戸出版界―役者絵を中心に』

勉誠出

18 · 北原糸子著『近世災害情報論』塙書房 19. 国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館資料図録7 2003 死絵』2010

35 —

Masterworks: 1680 - 1900 * Tuttle Publishing, 2010

21・富澤達三著『幕末の時事的錦絵とかわら版』文生書院

22・藤澤茜 『浮世絵が創った江戸文化』 笠間書院 2013

23・大久保純一著『浮世絵出版論 大量生産・消費される 〈美術〉』吉川弘

24・アンドレアス・マークス 2014「国貞による最も成功した揃物「役者見 立東海道五十三次」とその基となる「見立役者五十三対ノ内」について」

(『没後一五○年記念 歌川国貞』展図録 太田記念美術館 2014)

御礼申し上げます。」 東京都立図書館、早稲田大学演劇博物館、 本稿をなすにあたり、 図版掲載のご許可を賜りました、 ボストン美術館の各機関に深く 国立国会図書館

【表1】『藤岡屋日記』の記述に見る話題作とその取り締まり

1854		1853				1852		1851	
嘉永七年		嘉永六年				嘉永五年		嘉永四年	年
八月六日	- - - - - - - - - - - - - - - - - - -		三月	七月	十一月	二月	七月	九月	月日
八代目團十郎の死絵について作者や板元、	「花・鬼神於松・板東しうか」「月・児来也・市川団十郎」「月・児来也・市川団十郎」「雪・石川五右衛門・市川小団次」「長立」三幅対」三代歌川豊国画	絵、其外右之類都合八十 二ヶ月、同江戸名所、同東都会席図二ヶ月、同江戸名所、同十二支、同十 東海道五十三次、同合之宿、木曾街	『江戸砂子細撰記』	国芳「浮世又平名画奇特」	助高屋高助死絵	中村歌右衛門死絵	「大蜘蛛百鬼夜行絵之番付」	※鯰絵に同構図のものがある「本朝振袖始」「本川北輝画	作品
2、取り締まりに関する記述なし	魚屋金治郎 住吉屋政五郎 榛屋小兵衛	十六人	品川屋久助による重板 後、取り締まり 甚左衛門、信濃屋富五郎による出版	越村屋平助	板木屋太吉	品川屋久助 ほか	品川屋久助、丹波屋半兵衛による重板太田屋佐吉出版後、発禁	る重板 橋本町板摺、浅草地内ならべ本屋によ 喰町三丁目徳三郎出版後没収 神田久右衛門町の板摺彦兵衛制作、馬	関与した者
	手鎖	板木取り上げ	品川屋久助は家主預け板元手鎖	過料、発禁	没収	没収	発禁	没収	処罰

1855									
安政二									
年 + + + + + + + + + + + + + + + + + + +									
十二月十三日	十二月十日	十二月六日	十 二 月 四 日						
	愈 絵 松 八 松 膵 力 西 速 造 石 山 地 法 上 力 両 只								
八十七人	絵草紙屋百四十五人連印の誓約書提出	嘆願書の提出	九人						
り上げ 三百二十八枚取			腰縄にて連行、一夜差し置き	摺溜め取り上げ	版木削り取り				

【表2】調査対象とした作品の出版時期と数量

東海道などの名所を背景に、歌舞伎の舞台設定などで地名と結びついた役者を見立てで描く。嘉永五年閏二月から出版された三代目歌川豊国画の「役者見立東海道五十三駅」シリーズを最大のヒットとして、(一)「役者見立名所絵」の作品群・・・約五百四十七図 同時期に多数出版される。

作品名	作者	板元
五十六図 「役者見立東海道五十三駅」第一期 「森永五年閏二月―六月	三代歌川豊国	辻岡屋文助、伊勢屋兼吉、住吉屋政五郎、井筒屋庄吉
(全七十一図と目録) 「木曾街道六十九次之内」 「本曾街道六十九次之内」	歌川国芳	安兵衛総屋岩蔵、小林泰治郎、湊屋小兵衛、林屋庄五郎、治屋岩蔵、小林泰治郎、湊屋小兵衛、林屋庄五郎、土岡屋文助、伊勢屋兼吉、住吉屋政五郎、井筒屋古、
十二図 「江戸名所見立十二ヶ月」 - 京永五年七月―九月	歌川国芳	加賀屋安兵衛
三十三図 三十三回 三十三図 三十三回 三日回 三回 三十三回 三日回 三日回	歌川国芳	山口屋藤兵衛、三田屋喜八
二十九図 「役者見立東海道五十三駅」第二期 嘉永五年八月―同六年一月	三代歌川豊国	辻岡屋文助、伊勢屋兼吉、住吉屋政五郎、井筒屋庄吉、
五十七図 「役者見立東海道五十三駅」第三期「間の宿」 嘉永五年八月―同六年二月	三代歌川豊国	屋岩蔵、小林泰治郎、玉屋惣助、清水屋直次郎辻岡屋文助、住吉屋政五郎、井筒屋庄吉、蔦屋吉芸
現存確認二十図 「江戸紫五十四帖」	三代歌川豊国	森屋治兵衛

※他に派生作品として双六なども存在するが、ここでは含めないものとした。 現存確認十九図 現存確認三十九図 嘉永五年十二月— 全六十八図 嘉永五年十二月頃 全七十一図と目録 嘉永五年十月—十二月 全五十四図 「東海道五十三次」 嘉永五年九月—六年九月 全三十六図 「見立三十六歌撰之内」 嘉永五年九月—十一月 「江戸名所図会」 嘉永五年七月—十一月 大日本六十余州」 木曽六十九駅」 東都高名会席尽」 -同六年二月 三代歌川豊国 三代歌川豊国 三代歌川豊国 三代歌川豊国 三代歌川豊国 三代歌川豊国 屋安兵衛 総屋岩蔵、小 藤岡屋慶次郎 井筒屋庄吉 伊勢屋兼吉 伊勢屋忠助 湊屋小兵衛、 小林泰治郎、湊町、伊勢屋兼吉、 遠州屋彦兵衛、 湊屋小兵衛、林屋庄五郎、辻岡屋安兵衛、加1、住吉屋政五郎、井筒屋庄吉、高田屋竹蔵、 浜田屋徳次郎、 林屋庄五郎 加賀

の落款や板元印、改印の残る以下を調査対象とした。の落款や板元印、改印の残る以下を調査対象とした。嘉永七年八月六日、八代目團十郎自死後より、安政元年三月六日初代坂東しうか没後の時期に多く出版され、約二百図が現存。そのうち作者(二)八代目市川團十郎死絵・・・二十四図

		EA	字阮和	EDO 3	书 110	苍弗 (5 (2	2015)		
「子十一、米良、渡辺」 嘉永五年十一月	「子十一、米良、渡辺」	「子十、村松、福島」	「子七、米良、渡辺」	「衣笠、村田」「衣笠、村田」	「米良、渡辺」	「浜、馬込」	「浜、馬込」	「渡辺、衣笠」	「衣笠、村田、シタ売」 嘉永四年九月	改印の時期
歌川国芳	三代歌川豊国	三代歌川豊国	三代歌川豊国	歌川国芳	歌川国芳	歌川国芳	三代歌川豊国	歌川国芳	三代歌川豊国	作者
三田屋喜八嘉永五年十一月上演早野勘平姿の流用	藤岡屋慶次郎	(当時の板元 玉屋惣助) - 「一下を開け、「一下を開いて、「一下を開いて、「一下を開いて、「一下を開いて、「一下を開いて、「一下を開いて、「一下を開いて、「一下を開いて、「一下を開いて、「一下を開いて、		海老屋林之助	海老屋林之助	海老屋林之助	林屋庄五郎	海老屋林之助	(当時の板元 藤岡屋慶次郎) 嘉永四年九月上演足利次郎ノ君姿の流用	板元名

	41 —		Щ	弘伝 乙	以几					
安政元年三月六日初代坂東しうか没後に発行されたもの	図) (八代目團十郎の軸を父・五代目海老蔵が拝む不明	不明	「改、寅九」	「改、寅六」	「改、寅四」	「改、寅四」	「改、寅三」	「改、丑十二」	「改、丑十一」	「丑三、米良、渡辺」 嘉永六年三月
たもの	三代歌川豊国	三代歌川豊国 の、 水色の落款のも の、 水色の落款のも の、 落款の無いもの	三代歌川豊国	三代歌川豊国	三代歌川豊国	三代歌川豊国	三代歌川豊国	三代歌川豊国	歌川国芳	三代歌川豊国
			伊場屋仙三郎	三田屋喜八	加賀屋吉右衛門	加賀屋吉右衛門 嘉永七年五月上演に先立って描かれた「大星由良之助」姿の流用	辻岡屋文助 嘉永七年三月上演横曽根平太郎姿の流用	高野屋友右衛門	山本屋平吉	木屋宗二郎 嘉永六年三月上演伊豆屋与三郎姿の流用

或	學	完雜誌 第 116 巻	第7号	7 (201	.5)		— 4	2 —
「玉屋地新兵衛桶伏の段 火夜苦の門並」安政二年十月二日―十二月	出版時期	その中でも役者見立名所絵のうち、国芳画「木曾安政二年十月二日江戸地震直後より出版され、(三) 鯰絵	「改、卯十一」 安政二年十一月	「改、寅十一」		「改、寅九」	「改、寅五」	「子七、米良、渡辺」 嘉永五年七月
不明	作者	ち、国芳画「木曾街道六十三次」 後より出版され、三百図近く出版されたと記録に残る。	三代歌川豊国	三代歌川豊国		三代歌川豊国	三代歌川豊国	三代歌川豊国
不明	板元	たと記録に残る。現存は二百点ほど。	恵比須屋庄七			山崎屋清七	井筒屋庄吉 - 京永七年五月「雲艶女鳴神」上演時の板流用	

【表3】幕末期に活動が盛んであった板元一覧

8	7	6	5	4	3	2	1	
越後屋鉄次郎	魚屋金治郎	仙堂) (団扇堂・団 田里郎	糸屋庄兵衛	井筒屋庄吉	(介) 伊勢屋忠助	伊勢屋兼吉	和泉屋市兵衛	名前
	嘉永6年「日			0	0	0		没者名所絵 嘉永6年
	見立三幅対」	0		0				8代目死絵 嘉永7年
0							×	鯰絵 2年
				死絵 2年				その他
腰縄	手鎖			板木没収	板木没収	板木没収		処罰歴
池之端仲町、家主	日本橋品川町	人組持店 上 工町一丁目五	地借通三丁目熊次郎	年8月より) 本石町二丁目銀 2	三島町武兵衛店 三島町武兵衛店	金次郎店	太助店,惣八店 芝神明前三島町	の有無と地震被害
仮組		仮組			仮組	仮組	★ 本 組	仲間区分 の
		地震時無事 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	(安政2年10月2日) 仮名垣魯文に戯作本を依頼	幕末から	図 ―11月「江戸名所図会」19 早末から 19 19	板元く手掛ける。「三十六歌撰」と手掛ける。「三十六歌撰」」がある。	に、主傷心地震被害大きい。 3人死地震被害大きい。 3人死地震被害大きい。 3人死	特記事項

15	14	13	12	11	10	9
(岩吉)	角本屋金次	加賀屋安兵衛	(青盛堂)	遠州屋彦兵衛	(海寿堂)	(錦昇堂)
0	0	0				
			0		0	
				0		
						市川猿蔵死絵
板木没収	板木没収	板木没収		腰縄		
兵衛と同所 助店、山城屋甚 芝口三丁目金之	政2年9月より)弓町与助店(安	兵衛店工丁目伝	吉川町五番地 門店、のち日本橋 門店、のち日本橋	熊次郎店 日本橋通三丁目	兵衛店	丁目政治郎地借丁日本橋小船町三
仮組				仮組	仮組	★本組
幕末から	板木没収 画「見立十二支の内」12枚 画下見立十二支の内」12枚 12枚		文化より	幕末から	総。 三代豊国の役者 がいる。 三代豊国の役者 がい物を多く がい物を多く がいりである。 を始める。	地震時無事。 弘化ごろから商いを始め、 京本 1 日本 1 日本 2 日本 2 日本 2 日本 2 日本 2 日本 2 日

24	23	22	21	20	19	18	17	16
(鳳來堂)	上州屋金蔵	清水屋直次郎	清水屋常次郎	(當世堂)	(喜鶴堂)	(文正堂)	越村屋平助	森宗次郎) (紅木堂·小
嘉永6年「見立三幅対.		0				0	嘉永6年「	
見立三幅対」							「浮世又平」	0
	0		0	0	×			
手鎖	腰縄	板木没収	腰縄	家 主 預 け		板木没収	過料	
11月より) 助店(嘉永5年	家主上野元黒門町、	喜兵衛店 新両替町一丁目	目 神田鍛冶町壱丁	(安政二年) 大伝馬町一丁目	長兵衛店 角五郎兵衛店、 芝神明前三島町	下谷稲荷町	岳寺喜兵衛店	丁目佐吉店日本橋馬喰町四
仮組	世★ 話本 組	仮組	仮組		★本組		仮組	
嘉永期に錦絵の刊行が多い文化より	文政から	鍵屋清次郎と同じ板元印弘化から		双紙の利益で家を贈っている 東永6年、仮名垣魯文作の草 へのを出す。 を出す。 を出す。 を出す。 を出す。 を出す。 を出す。 を出す。	地震被害大きい。 を得し、本に、本泉ない。	玩具絵 (安政元) (安政元)	幕末から	安政元年か

33	32	31	30	29	28	27	26	25
林屋庄五郎	(永寿堂)	虎屋倉吉	(紅英堂)	(錦魁堂)	港堂) 港堂、金	玉屋惣助	門野屋友右衛	高田屋竹蔵
0			0	0	0	0		0
0					0		0	
	0		取り締まる	取り締まる				
板木没収	腰縄		板木没収	板木没収	板木没収	板木没収		板木没収
国久太郎店 両国米沢町一丁	店(庄右衛門店)日本橋馬喰町二	江戸八丁堀	勝五郎店	勝五郎店	8月より) 地借(安政2年 地価(安政2年 両国横山町三丁	浅草坂本町弥吉店	5月より) 六店(嘉永6年	組持店
仮組	★本組		行★ 事本 組	行★ 事本 組	★ 本 組			
弘化ごろより	絵の代表的板元。 を居などを手掛けた江戸錦 をである。	かわら版屋	地震時無事だが仮屋住まい英泉の五十五枚揃など英泉の五十五枚揃などす計しる。有力版元。	地震時無事だが仮屋住まい英泉の五十五枚揃など英泉の五十五枚揃など英泉の五十五枚揃など	出版も。 二代国貞や広景など若手の 二代国貞や広景など若手の はり本組株を譲り受け、仮 より本組株を譲り受け、仮	幕末から	弘化初期の国貞の作例	前帳」に記載 第永5年「地本草紙問屋名

38	37	36	35	34
喜) 三田屋喜八	(三鉄) 三河屋鉄五郎	(円寿堂)	藤岡屋彦太郎	栄堂) (松林堂・松 藤岡屋慶次郎
			国芳「みかけ	0
0			国芳「みかけハこハゐがとんだいい人だ」	Δ
		0	とんだいい人	
	『安政見聞誌』 安政3年		だ」	
	沙汰なし	腰縄		板木没収
橋 兵衛店、のち大 兵衛方、のち大	所同店 山城屋平助と同 平次郎店 工大工町	芝神明前三島町		政2年8月より)政2年8月より)
	絵双紙糶売	★本組		★ 本 組
明和より	木一時取り上げ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	の死絵を三代豊国が描くの死絵を三代豊国が描くで入1年に二代目中村翫雀文久1年に二代目中村翫雀文久1年に二代目中村翫雀文久1年に一代目中村翫雀の錦絵の有力板元。	寄たかり」作例の類似総絵「面白くあつまる人が	天保より 天保より 素永5年4月、兄藤岡屋彦 本郎より書物問屋本組株を は重、国貞の揃い物を多く 手掛ける。 原本5年12月―6年2月三 嘉永5年12月―6年2月三 京田西「東都高名会席 で、国東の揃い物を多く 京田で、仮名垣魯文を を、また、ので、ので、ので、ので、ので、ので、ので、ので、ので、ので、ので、ので、ので、

45	44	43	42	41	40	39
両国屋庄吉	万屋吉兵衛	(栄久堂)	(山静堂)	春錦堂) (錦耕堂のち	(兵 衛 (錦 森 兵 衛 (錦 森	小) (錦船 堂・湊 湊屋小兵衛
				鯰絵を取り上げまわる		0
		0		上げまわる		
0	0	0				0
			しうか死絵			
	腰縄	腰縄				板木没収 腰
馬喰町三丁目	店 (清助店)	(天保) 主、葺屋町河岸 堀江六軒町家 旧本橋吉町川岸	草並木町	久兵衛店 側利右衛門店、 馬喰町二丁目北	側馬喰町二丁目南	店
	★本組	世★ 話本 役組		組書物問屋仮 (大本組		仮組
	幕末から	文化より、江戸で五本の指文化より、江戸で五本の指文と別様の経を手掛ける。三代日市川門松本幸四郎、三代日市川門松本幸四郎、三代日市川門の総を手掛ける。三年の第二十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十	文化より	鯰絵を取り上げまわる 画「江都錦今様国尽」板元 画「江都錦今様国尽」板元 京化より。	文化4年頃より。文化4年頃より。	多く手掛ける 三代豊国、国芳の名所絵を 天保〜安政